

Department of Education alumni association

あすなろ

2022 No.44



発行
弘前大学教育学部同窓会
相馬 正 栄

所在地 青森県弘前市文京町1
TEL 0172(39)3314 (学部)



新たな区切りの年を迎えて

教育学部長 福島 裕敏

同窓会の皆様におかれましては、平素より教育学部の教育研究活動への多大なるご理解・ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

新型コロナウイルス感染症拡大から3年の月日が経とうとしています。現在のところ、全学的な休講措置やメディア授業への移行措置もなく、教育研究活動を進めてきております。今年、3年ぶりに学園祭も対面で行われ、期間中に行われた保護者懇談会には相馬会長にもお越しいただきました。さて、今年度から第4期中期目標・中期計画期間に入りました。国立大学法人は、6年ごとに中期計画を掲げ、その達成に取り組むことになっていきます。教育学部に直接関わるものとしては、次の四つがあります。①教職大学院を中心として、青森県教育委員会等と連携し教員のキャリアアステージを視野に取めた教員養成・研修プログラム開発と支援体制の整備を行う。②教育学部を中心に、「全学

教員養成センター（仮称）」を設置し、他学部も含めた全学的な教職課程の整備を図る。③附属学校園において、青森県の課題であるミドルリーダ育成を念頭において研修・研究体制を整備し、地域の教員に、より実践的な研修の場を提供する。④同じく附属学校園において、モデル校として地域の教育課題の解決に向けた先導的なモデルを開発し、その成果を地域に還元する。

特に①では、校長推薦を受けた経験年数16年以上の小中高特の教員を対象とした充実期研修と指導主事研修を、今年度から本格実施しております。③では学部・附属学校園の協同による研究推進部を立ち上げ、四校園の合同公開研究会の開催等に取り組んでおります。さらに④では、通常学級における特別支援教育の充実に向け、「特別支援室」を開設し、今年度から特任教員3名を配置し、インクルーシブ教育システムの構築に向けて取り組んでおります。

これら4つの中期計画以外にも、教育学部では、今年度から2年間に、JICA（国際協力機構）の課題別研修「教員養成課程のアップグレード」教師がかわれば未来が変わる」を受託し、開発途上国12カ国から16名の研修員を受け入れました。また令和4年7月に教員免許状更新講習が廃止されたことを受けて「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けた教員研修プログラムの開発に取り組んでいる



七五三

同窓会副会長 竹浪 誠也

(昭和49年卒業)

昭和48年度教育学部卒業、71才になりました。

教職に就きましたので、卒業後も大学とはそれなりのかかわりを持つてきました。新採用間もないころ、理科教育の県大会で実践発表をすることになり、実践内容とその理論構成を恩師の奥田光直教授にいろいろアドバイスを戴きました。県教育庁指導課時代、当時新設された「生活科」担当となったとき、理科教育のエキスパートで卒論の指導教官だった平田貞雄教授に多くの教を授かりました。また、勤務校での校内研究には、中野博之先生はじめ教育学部の先生方を時々講師に迎え、研究を深めることができました。

教員採用試験の面接官をしたときなどは、弘前大学の学生と聞く

ところです。第4期中期目標・中期計画期間の初年度という新たな区切りの年を迎える中、学部・教職大学院・附属学校園が、連携・協働を図りながら、地域の「知」の拠点として、青森県を中心とした教員養成・研修の充実、ひいては教育の充実に尽力したいと思っております。何卒、引き続き、ご支援ご鞭撻のほどよろしく願っています。

と、少なからず頑張つてほしいと思つたものです。教職人生で大きかったのは、弘前大学教育学部附属小学校に6年間勤務したこと。教育実習生がやがて教師となり、学校現場で出会うこともしばしば。うれしいものです。また、大学の「生活科講座」「理科教育専門講座」等の講義も数年にわたり担当させていただきました。

当時、教育学部では教科教育研究紀要を年2回出しており、受理された論文が掲載されていきました。私も「学習意欲の持続」をテーマにした12の論文が受理され、その後の指導主事、教育行政勤務、教育実践の礎となりました。御指導いただいた大学の先生方には感謝しかありません。

思いがけず、退職後も教育学部同窓会の役員となり、今も大学とつながっております。同窓会「北五支部」では、教育学部の先生方を講師に迎える研究会、弘大フェイルの鑑賞会等を実施する場合、補助金を出すことにしています。ぜひ、この補助金制度を活用して、教育活動の充実に役立てていただければ幸いです。

さて、表題の「七五三」ですが、これが大学との結び付きでは一番でしょうか。七五三の意味は、75歳まで3人で飲み会をやりましょうという同期会のことです。教育学部物理教室の同期男子3人が年1〜2回集まって、とにかく自慢話をする会のことです。一人は社会福祉活動自慢、一人はシニア卓球自慢、私は俳句自慢と話がかみ合うことはありませんが、夜を徹して騒ぎます。教育学部からもらった大きな財産、自慢の遺産であります。お互い元気なので、目標の75歳はクリアしそうですね、今後、「八五三」に変更しようかと考えています。

いづれにしろ、私たちは縁あって弘前大学教育学部を卒業した者、縁を切らさず、大いに大学を活用し、地域の教育に還元していければと思っております。その大学と学校現場との橋渡しの一助としてこの同窓会があることを願います。





木材加工研究室の紹介

「りんごの木や枝の活用を中心に」

技術教育講座 准教授 廣瀬 孝

木材加工研究室は、現在、教員1名と学生6名の体制で運営しています。研究テーマの多くは、地域の企業等の皆様と共同（本年度は有限会社アサヒ印刷を含む9社）で推進しているのが特徴です。当研究室の名前にもある木材加工とは、「木材を1)変形、2)変質、3)混成等の技術的手段によって、その効用を発生させ、または増加させて、その利用価値を増殖する生産行為（梶田茂編「木材工学、P799」）と定義されています。この考え方を基本として、各自が受け持つ木材や地域バイオマス等を対象とした研究を進めています。その中で青森県らしいテーマとして、りんご木や枝を対象としたものがあります。これらを上記の定義に当てはめると、1)としてPCケース、2)として紙、活性炭、乾燥、3)として木質ボード等が該当します。今回、このような機会を頂きましたので、1)〜3)の中からPCケース、紙、活性炭に焦点を当て、当研究室が進めている内容について、ご紹介したいと思います。



図1 試作したPCケースおよびパームレスト

びパームレストを試作しました（図1）。今後、課題の解決を図りながら、製品化を目指す予定です。また、執筆者が会長を務めるひろさき産学官連携フォーラム・りんご／さくら和紙研究会では、三菱製紙株式会社八戸工場の協力で、りんごの剪定枝を原料とし、手漉きにて紙を作製してきました。令和3年度は「むつ小川地域・産業振興プロジェクト支援助成事業」の助成を受け、量産化を目指して機械漉きを検討、機械による試作をすることができました。また、試作した紙を用いて、りんごジュース用のラベルや貼箱等への利用を検討し、JA相馬村や地域企業の協力のもと、試作品を作製することができました（図2）。今後、原料であるりんご剪

定枝の収集や粉砕方法等を検討し、製品化を目指す予定です。更に、りんご剪定枝を原料として活性炭を作製、酸洗浄等を加えて蓄電デバイスである電気二重層キャパシタ用活性炭として調製後、市販活性炭とともに細孔物性やキャパシタ性能等を調べ、両者を比較検討しました。その結果、ある条件で作製したりんご剪定枝活性炭は、市販品と同程度の性能を示しました。また一定の範囲のミクロ孔（2nm以下の孔）を多く有する活性炭が高いキャパシタ性



インクルーシブ教育と地域に開かれた学校づくり

附属特別支援学校 校長 川村 泰弘

附属学校園では、2019年12月に校是「結び紡ぐ」を制定し、幼児児童生徒が自らの価値に基づいて自律的に判断、行動しつつ、多様性を受容しながら新たな価値観を醸成し得る教育を目指すこととしました。

この校是制定の背景には、多様性を尊重し価値を共有する「共生社会」の実現があります。附属学校園ではこれを具現するため、小学校と中学校に設置された特別支援教室「びあるム」と特別支援学校が連携し、インクルーシブ教育システム構築の視点から、特別な支援を必要とする子どもへの支援体制づくりと、仲間と共に学び地域と共に育む学習環境づくりを取り組むこととしました。

能を有するところが分かりました。今後、得られた知見を活かし、応用化を図っていく予定です。



図2 試作したりんごジュース用のラベルや貼箱

更に色々な技術的手段を駆使し、その効用を発生させ、または増加させて、その利用価値を増殖する生産行為を推進することで、地域の産業振興に貢献していきたいと考えています。

1つめはスポーツ活動です。本校では、これまでスポーツ庁の事業を7年連続で受託し、地域における障害者スポーツやインクルーシブスポーツの拠点として、大学や行政、総合型スポーツクラブ等との連携の下、スポーツ教室や幼児の身体運動に関する相談会、フライングディスク交流大会等を開催してきました。幼児期から学校卒業後までの連続したスポーツの取組は「弘前大学モデル」として、文部科学省が公表した「グッドプラクティス事例」でも紹介されました。



造形作品展

システム構築の一環として、「地域に開かれた学校づくり」という視点から本校（附属特別支援学校）が進めている取組を4つご紹介いたします。

2つめはキャリア教育です。本校では、大学や地域と共同でキャリア教育を展開しています。具体的には、高等部の作業学習において、ビル管理会社やホテルの社員から清掃や喫茶サービスに関する専門的なスキルを学び、生徒は弘前大学や弘前市役所等で実際に清掃や喫茶サービスを経験する中で働く力を身に付けます。また、小学部では大学構内の落ち葉集め、中学部では作業学習で作った製品の大学祭での販売など、段階的に働く経験を積み重ね、高等部での学習や卒業後の社会参加につなげています。

3つめは造形活動です。本校では毎年、弘前市内のスタジオを使って造形作品展（写真）を開催しており、児童生徒が制作した作品を多くの市民の方に見ていただくことで、学校や児童生徒の理解啓発に努めています。作品展では、児童生徒の作品に対して、毎回多くの来場者から賞賛の言葉をいた

「聾学校における授業」と言えば、「手話を用いた授業」のイメージが強かったが、聾学校に赴任し、そうではないことに驚いた。聾学校の幼児児童生徒のきこえの状態はさまざまであり、口話や手話など授業の手段も複数ある。きこえの状態や特性に合わせた授業を行うことが必要であり、どの幼児児童生徒にとっても、視覚的な情報提示の工夫が重要であると感している。聾学校における指導の工夫について考えるきっかけとなった出来事がある。担当する国語の授業内で、生徒に教科書の音読を促した場面である。教科書を読むために生徒はうつむき、私の口の形が見えなくなってしまう。それに気付かず発問や説明をしてしまい、生徒は発問を聞き逃す、内容の理解が曖昧のままになってしまふなどの問題が生じてしまった。自分の至らなさを反省し、聾学校における配慮や専門性

について深く考えるようになってきた。現在は、口の形を見ながら話を聞けるよう、教科書本文やワークシートはスクリーンやモニターに映し授業を進めている。また、押さえてほしい重要語句や意味が捉えづらい文章は手話、指文字で表現し、生徒がより意味を理解しやすいよう工夫を行っている。また、板書にも力を入れている。板書計画は毎時間作り、授業後は写



日々挑戦
青森県立青森聾学校 教諭 宇野かりん
(特別支援教育専攻 令和4年卒)

だき、それが児童生徒の制作意欲の向上につながっています。また、作品の制作や作品展の開催にあたっては、大学の先生から専門的なアドバイスをいただいています。

4つめは他校との交流及び共同学習です。本校では、附属小中学校、弘前実業高等学校と定期的に交流及び共同学習を行っています。

本校の子どもたちにとっては社会性を広げ、交流校にとつては障害のある子どもへの理解を深めるための重要な学習機会になっています。コロナ禍にあって対面での交流が難しい局面もありましたが、オンラインを活用するなどして交流を継続することができました。

真を撮って板書を見直し改善点を考えるようにしている。一時間の学習の内容が、見てすぐに理解でき、学習の定着を図れるような丁寧な整理された板書をしたいたいと思っている。

また、聾学校において、教科指導と同時に言語指導を行う必要性があることを実感した。コミュニケーションに難しさはなくとも、作文や意見発表を行うと、誤字脱字や不自然な表現が見られることがある。この言語における難しさの原因や、課題について考えていくことが聾学校の専門性であると学んだ。国語の授業だけでなく、自立活動や日常生活でも言葉の意味を問いかけて、わからなければ調べるといふ流れを定着させ、言語に関する指導を続けている。そして、以前間違えた言葉を生徒が活用できるようにするなど、成長の過程を間近で見られることが、教員の一番のやりがいであると感

学校での生徒への指導や校内研修、さらに初任者研修を通して、知識を増やし自らの視野を広げることができていると感じる。指導を通して、生徒の成長を感じるだけでなく、自分の成長も感じられることを非常に嬉しく思う。自己研鑽の気持ちを強く持てるという点も、教員という職業のやりがいであると思う。日々学びに向かう姿勢を忘れず、生徒に真摯に向き合っていくことが大切であると思う。

**■既卒者■のための
教員採用試験対策講座
のご案内**

既卒者を対象として、主に2次試験対策を実施します。積極的にご参加ください！
お申し込み、お待ちしております！

日程：2023年7月31日(月)～8月4日(金)
(既卒者のための教員採用試験対策週間です)

①11:05～11:50	②13:25～14:10
③14:20～15:50	④16:00～17:30

対象者：弘前大学卒業生・修了生

内容：主に2次試験対策

①小論文の添削	②自己PR	③個人面接・集団面接
④集団討論	⑤模擬授業	⑥場面指導

場所：弘前大学教育学部2階 教職支援室
担当：教職キャリア支援コーディネーター

山田 真寿美先生 (ky-sien5@hirosaki-u.ac.jp)
葛西 裕幸先生 (hi-kasai@hirosaki-u.ac.jp)
工藤 美代子先生 (miyo-kudoh345@hirosaki-u.ac.jp)
佐藤 忠浩先生 (sato-chu3387@hirosaki-u.ac.jp)

申込：弘前大学教育学部教職支援室 0172-39-3423
または、上記の各先生方のメールアドレスまで

・小論文添削希望者は、事前にメールに添付の形で送信ください。
・身近な講師にもお伝えください。
・様々なご要望に適宜対応いたします。

注目：上記期間以外でも指導いたします。ご連絡ください。

■主催：弘前大学教育学部教職支援室・就職支援委員会
■後援：弘前大学教育学部同窓会

コロナ禍での同窓会の活動

■学部との懇談会

一昨年、昨年と実施できませんでしたでしたが、今年も中止となりませんでした。教育学部の現状について福島学部長から資料をいただきましたので一部ご紹介いたします。

◆入学者数 一六八八人(一六〇)

◆出身県 青森県86人、北海道19人、東北地方(青森県以外)42人、関東地方14人、その他7人(志願倍率 前期三・六倍 後期一四・七倍)

◆入試改革(令和三年)

前期入試における面接試験を導入し、教職に対する強い意欲を持ち、コミュニケーション能力を有する学生を選抜することとした。

◆教職支援室による教職キャリアサポート体制の充実

■既卒者対象の教員採用試験対策講座への支援(左案内)

◆地域協働型教員養成

中南教育事務所管内の全ての市町村教育委員会が参画している中、南地区連携推進協議会を中心に、健康教育、インクルーシブ教育、地域協働型教員養成に関する事業を実施した。(八年目)

◆R三年度利用者 三六一〇名

教職支援委員会と教職支援室の共催により、集団指導として、三年次十月から四年次八月までの定期的な八回の教員採用試験対策講座を開講している。

R三年度はコロナの影響もあり、後期中からオンラインで対応した。

